

学 位 論 文 要 旨

氏 名 青山 聡

題 目 A Study of the Effectiveness of Written Corrective Feedback on L2 Development by Japanese Learners of English (日本人英語学習者の第2言語発達を促す書き言葉による訂正フィードバックに関する研究)

学位論文要旨 (和文 2,000 字又は英文 1,000 語程度)

本論文の目的は、学習者の英語熟達度に応じて、第2言語学習に最も効果的な書き言葉による訂正フィードバックを特定することである。この目的のため、書き直しや新しい英作文、異なる英作文課題、明示的・暗示的知識の獲得における数種類の書き言葉による訂正フィードバックの相対的效果を、英語熟達度ごとに調査した。また本論文は学習者のフィードバックに対する心的態度をアンケートにより明らかにし、それとフィードバックの効果との関係についても考察した。

第1章では、訂正フィードバックの定義を説明した後、訂正フィードバックが与える否定証拠や、訂正フィードバックがもたらす「気づき」や「仮説形成・検証」が言語学習にどのように影響を与えるのかというSLAの観点及び、日々の授業で遭遇する多種多様な誤りにどのように対処すればよいかという教師の観点から研究されてきたことを紹介する。またその明示度の高さや付与する際の心理的負担の少なさなどから、第二言語発達に適していると考えられるため、話し言葉ではなく、書き言葉による訂正フィードバックに焦点を当てること述べる。

第2章では、これまでの散在していた訂正フィードバックの分類法を一つにまとめ、どのように書き言葉による訂正フィードバックが言語発達を導くかについて Gass (1997)の認知処理モデルを参考に説明を試みる。そしてこれまでの相対的效果を検証した先行研究の結果や課題を説明する。

第3章では、直接的訂正フィードバックとメタ言語的訂正フィードバックの書き直しと新しい英作文における相対的效果を検証した研究を紹介する。扱う文法は仮定法であり、実験参加者は英語熟達度高位群・低位群に分けられた。結果は、高位群では、書き直しについては両フィードバックとも効果があったが、新しい英作文においては相対的な優位さは観察されなかった。低位群では、直接的訂正フィードバックは書き直しのみ効果があったが、メタ言語的訂正フィードバックは、始めは書き直しには効果は弱かったが、徐々に強めていき直接的訂正フィードバックと同程度の自己訂正率を獲得し、それに伴い新しい英作文での正確さも向上させたことが明らかになった。

第4章では、焦点化直接的訂正フィードバック、非焦点化直接的訂正フィードバック、焦点化メタ言語的訂正フィードバックの相対的効果を時間制限のない文法性判断テスト、和文英訳テスト、エッセイライティングテストという3種類の異なるテストを用いて測定した研究を紹介する。実験参加者は熟達度高位群と低位群に分けられ、扱った文法は仮定法であった。結果は高位群ではどのテストにおいても、ある特定のフィードバックに相対的優位性は観察されなかった。低位群では、文法性判断テストと和文英訳テストでは焦点化メタ言語的訂正フィードバックが最も効果があった。しかし、エッセイライティングテストではその優位性は消えていた。このことからフィードバックの効果を測定するテストの種類によって効果の有無が変化することが明らかになった。

第5章では、直接的訂正フィードバックとメタ言語的訂正フィードバックが明示的・暗示的知識の獲得に与える相対的効果を測定した研究を紹介する。扱った文法項目は現在完了であり、実験参加者は熟達度高位群・低位群に分けられた。結果は、両群においてどちらのフィードバックも暗示的知識の獲得には効果がなかった。明示的知識の獲得においては、高位群ではメタ言語的訂正フィードバックが短期・長期ともに効果があった。低位群では、両フィードバック共に短期的な効果は見られたが、メタ言語的訂正フィードバックのみが長期の効果を有していた。

第6章では、直接的訂正フィードバック、間接的訂正フィードバック、メタ言語的訂正フィードバックの相対的効果を測定した研究を紹介する。扱った文法項目は現在完了・過去完了である。実験参加者は、一般的な英語熟達度ではなく、文法項目に対する熟達度(項目別熟達度)別に3群(高位群・中位群・低位群)に分けられた。高位群は直接的訂正フィードバックよりも間接的訂正フィードバックやメタ言語的訂正フィードバックの方が効果がある傾向があり、中位群は間接的訂正フィードバックよりも直接的訂正フィードバックやメタ言語的訂正フィードバックの方が効果がある傾向があった。また低位群はメタ言語的訂正フィードバックが直接的訂正フィードバックよりも効果があった。

第7章では、学習者の訂正フィードバックへの心的態度をアンケート調査により明らかにし、その結果と他の研究で明らかになった熟達度別の訂正フィードバックの効果との関連について考察する。そのアンケートの質的・量的分析の結果、熟達度高位群・低位群に関わらず、学習者は他の学習者よりも教師からの訂正フィードバックを求めており、直接的訂正フィードバックよりも、自己訂正の機会が与えられる間接的訂正フィードバックを好み、焦点化訂正フィードバックよりも非焦点化訂正フィードバックを求めていることが明らかになった。またフィードバックを得た後実際に書き直すことはほとんどないことが明らかになったが、この傾向は熟達度低位群により顕著であることが判明した。

第8章では、以上の研究結果より、概して、熟達度上位群にはどのタイプの訂正フィードバックも同様に効果があり、熟達度低位群にはメタ言語的訂正フィードバックが最も効果があると結論付けた。教育学的示唆として、メタ言語的訂正フィードバックを複数回与えていくことの必要性や得られた明示的知識を暗示的知識に変えるために他の言語活動と関連付ける必要性等を述べた後、さらなるメタ言語的フィードバックの質的向上のための研究をすることなど、今後の研究への提案を行った。